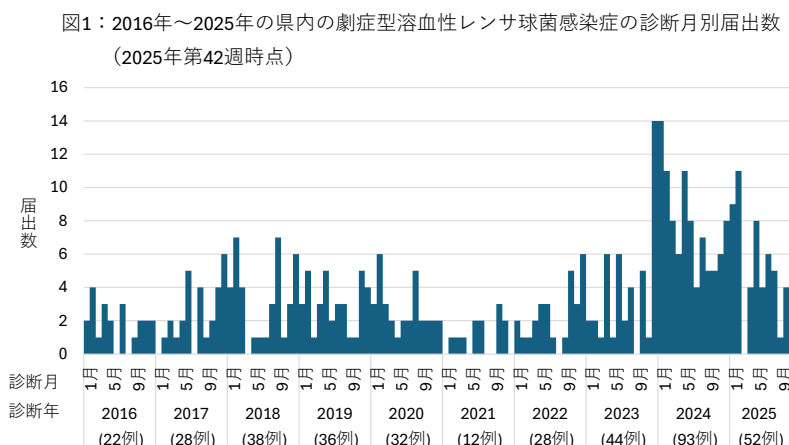


【今週の注目疾患】

《劇症型溶血性レンサ球菌感染症》

2025年第42週に3例の届出があり、本年の累計は52例となった（図1）。第42週時点において、直近10年間では昨年（76例）に次いで2番目に多く、引き続き発生動向に注意が必要である。

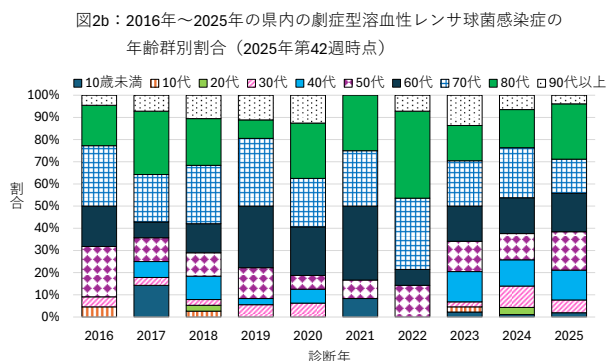
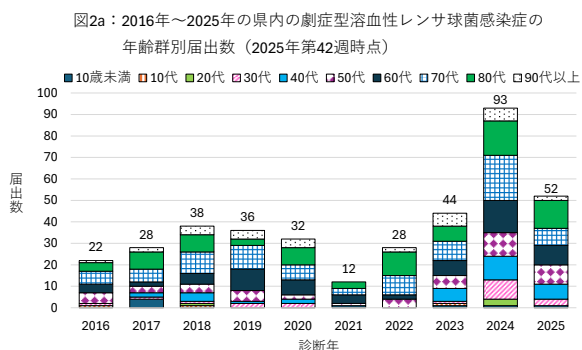


2016年から2025年第42週までに届出のあった385例の概要は以下のとおり。

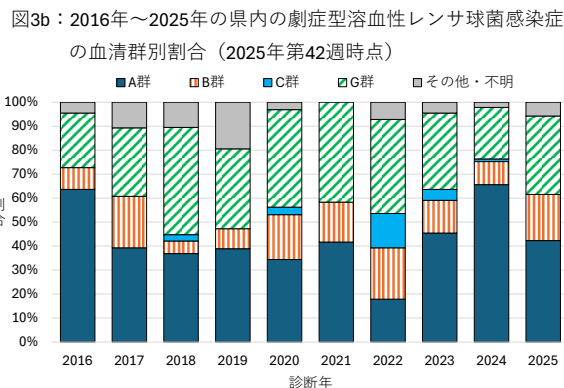
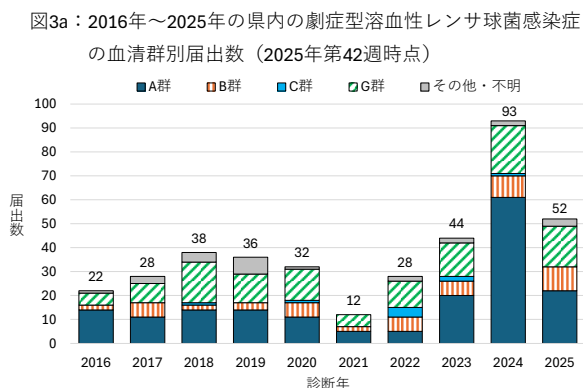
性別では、男性221例（57%）、女性164例（43%）であった。

年齢中央値では、届出数の多かった2023年以降の189例では67歳（四分位範囲※：51歳から80歳）と、2016年から2022年までの196例の74歳（四分位範囲：61歳から81歳）と比較して低くなった。年齢群別では、2025年は80代が13例（25%）と最も多く、次いで50代及び60代各9例（各17%）、70代8例（15%）が多かった（図2）。

※四分位範囲：年齢順に上から25%から75%にあたるデータの範囲をいう。



血清群別では、A群が177例（46%）と最も多く、次いでG群122例（32%）、B群52例（14%）、C群9例（2%）、その他・不明25例（6%）であった（図3）。A群の占める割合は、2024年は66%と2016年以降で最も高かった（年別では18%～66%）。



推定された感染原因・感染経路（重複あり）のうち、最も多く記載があったのは創傷感染で154例であった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症の初期症状としては、四肢の疼痛、腫脹、発熱、血圧低下などで、突然発病する例がある。

発病から病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、急性呼吸窮迫症候群（ARDS）、播種性血管内凝固症候群（DIC）、多臓器不全（MOF）を引き起こし、ショック状態から死に至ることも多い¹⁾。致死率は30%から40%とされる²⁾。

原因菌には、A群、B群、C群、G群レンサ球菌が主なものとして知られている³⁾。

近年、全国的に劇症型溶血性レンサ球菌感染症の届出数が増加している理由は必ずしも明らかではないが、2023年の夏以降、主な原因菌とされるA群溶血性レンサ球菌による急性咽頭炎の患者数が増加していることが要因の一つである可能性があると考えられている³⁾。A群溶血性レンサ球菌は、咽頭炎や膿痂疹、猩紅熱、劇症型溶血性レンサ球菌感染症など多様な疾患を引き起こす⁴⁾。なお、咽頭炎は冬から春にかけて報告数が増加するとされている¹⁾。

以下、厚生労働省ホームページのQ&Aから引用³⁾

Q 日常生活ではどのようなことに気をつけたら良いのですか？

A 劇症型溶血性レンサ球菌感染症に限らず、多くの感染症の予防には、手指衛生や咳エチケット、傷口の清潔な処置といった、基本的な感染防止対策が有効です。

また、発熱や咳や全身倦怠感などで食事が取れないなどの体調が悪いときは、かかりつけの医療機関などを受診しましょう。

「すぐに病院に行った方がよいか」や「救急車を呼ぶべきか」悩んだりためらうときに、医師・看護師等の専門家からアドバイスを受けることができる救急安心センター事業【#7119】に電話相談しましょう³⁾。

■参考・引用

- 1) 国立健康危機管理研究機構：劇症型溶血性レンサ球菌感染症 2015年～2025年6月
<https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/iasr/IASR/Vol46/547/547t.html>
- 2) 国立健康危機管理研究機構：劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）
<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ka/STSS/index.html>
- 3) 厚生労働省：劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137555_00003.html
- 4) 国立健康危機管理研究機構：A群溶血性レンサ球菌感染症
<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/alphabet/agun/index.html>